

大学図書館における「場所としての図書館」の利用実態

-横浜国立大学附属図書館における観察調査

立石亜紀子（慶應義塾大学大学院）

tateishi@slis.keio.ac.jp

1. 研究の目的

1-1 場所としての図書館

「場所としての図書館」(Library as Place) は、急速に進展する情報化社会がもたらした図書館機能の変化に対して、伝統的・本質的な図書館の役割とは何なのかを問い直す議論である。しかし、「場所としての図書館」をめぐる議論は公共図書館を中心として始まり、米国の大学図書館では日本に先行して意識が高まった¹⁾が、日本の大学図書館において議論されるようになったのはごく最近になってからであり、その理念や位置づけについての考察はまだ不十分である。

筆者は、「電子図書館」との対比から、「場所としての大学図書館」の本質的機能とは何なのかを明らかにしたいと考えている。本研究では、その一環として、利用者である大学生が場所としての大学図書館をどのように利用しているかを調査した。その結果から、今後の大学図書館に必要な「場所としての機能」について考察したい。

1-2 利用者調査の方法

図書館の利用者調査の方法には、質問紙調査、トランザクションログ解析、インタビュー、観察調査などが考えられるが、よく用いられているのは質問紙調査である。質問紙調査は、回答者が必ずしも正しい回

答をしないおそれがあり、調査できる内容もかなり限られている。本調査では、利用者の行動をより詳細に明らかにするために、観察調査を採用し、観察調査を利用者調査の手法として用いる意義を検討する。

2. 調査方法

調査対象は筆者の勤務先である横浜国立大学中央図書館とした。横浜国立大学は1949年に開学した4学部4研究科を持つ中規模国立大学で、奉仕対象者数は約12,000人(2009年現在)である。附属図書館は大学創設と同時に開館し、2001-2002年に改修・増築工事後、2003年にリニューアルオープンした。その際、滞在型図書館としての機能を先進的に取り入れてきた実績がある。したがって、近年注目を浴びる多機能型滞在型図書館を、大学生が実際にどのように利用しているか調査する対象として、適当であると判断した。

調査は2009年6月23日(火)～6月25日(木)の3日間、9:00～21:45までの開館時間内に実施した。中央図書館の各フロアを設備・機能により30のエリアに細分化し、それぞれのエリアにおいて、開館30分後から1時間おきに調査者を配置し、利用者がどこで何をを使ってどのような行動をしていたかを記録した。記録紙にはあらか

じめ想定される行動や利用物品を設定し、該当するものにチェック（複数チェックあり）を入れていく方式とした。チェック項目は事前のテスト調査により観察された行動・利用物品を元に設定した。

3. 調査結果

調査は1日12回、3日間で合計36回実施した。調査の結果観察できた人数は延べ9,610人であった。3日間総計の時間帯別の観察人数と割合を第1表に示した。

第1表 時間別利用人数

時間	人数	%
16:30	1,105	11.5%
15:30	1,075	11.2%
13:30	1,066	11.1%
17:30	1,013	10.5%
14:30	1,008	10.5%
12:30	948	9.9%
18:30	823	8.6%
11:30	668	7.0%
10:30	606	6.3%
19:30	580	6.0%
20:30	463	4.8%
9:30	255	2.7%
合計	9,610	100.0%

3-1 エリア属性から見た利用人数

調査を実施した30のエリア別に、利用人数と割合を示したのが第2表である。続いて、第2表の30のエリアをエリアの属性ごとに6つのタイプ（閲覧席/PCスペース/リラックススペース/書架/グループ学習室/その他）に分類し、人数と割合を集計した。結果が第3表である。集計の結果、もっとも利用人数が多かったのは属性が閲覧席のエリアで、続いてPCスペース、リラックススペースとなり、書架とその他（カウンターエリア等）が同程度、最も少ないのはグループ学習室ということがわかった。さらに、

第2表 エリア別利用人数

エリア名	人数	%
2F PCブラザ	1,993	20.7%
カフェ	858	8.9%
3F図書閲覧席A	781	8.1%
情報ラウンジ	772	8.0%
3F図書閲覧席B		
+パノラマ閲覧席	588	6.1%
2F閲覧席A	505	5.3%
閲覧席D&携帯電話コーナー	472	4.9%
4F閲覧席C	405	4.2%
2F閲覧席B	386	4.0%
リフレッシュ・ルーム	352	3.7%
3F書架エリア	328	3.4%
3F PCブラザ	323	3.4%
3F閲覧席C	259	2.7%
カウンターエリア	229	2.4%
2F閲覧席C	195	2.0%
2F書架エリア	184	1.9%
4F閲覧席B	182	1.9%
4F閲覧席A	153	1.6%
コピーコーナー	137	1.4%
OPACコーナー	106	1.1%
3F閲覧席B	83	0.9%
2Fワーキングスタジオ	66	0.7%
メディアブース	60	0.6%
3F閲覧席A	42	0.4%
AVエリア	41	0.4%
BF/1F書庫	35	0.4%
3Fワーキングスタジオ (雑誌フロア側)	23	0.2%
3F ワーキングスタジオ	22	0.2%
3F雑誌書架エリア	16	0.2%
4F雑誌書架エリア	14	0.1%
合計	9,610	100.0%

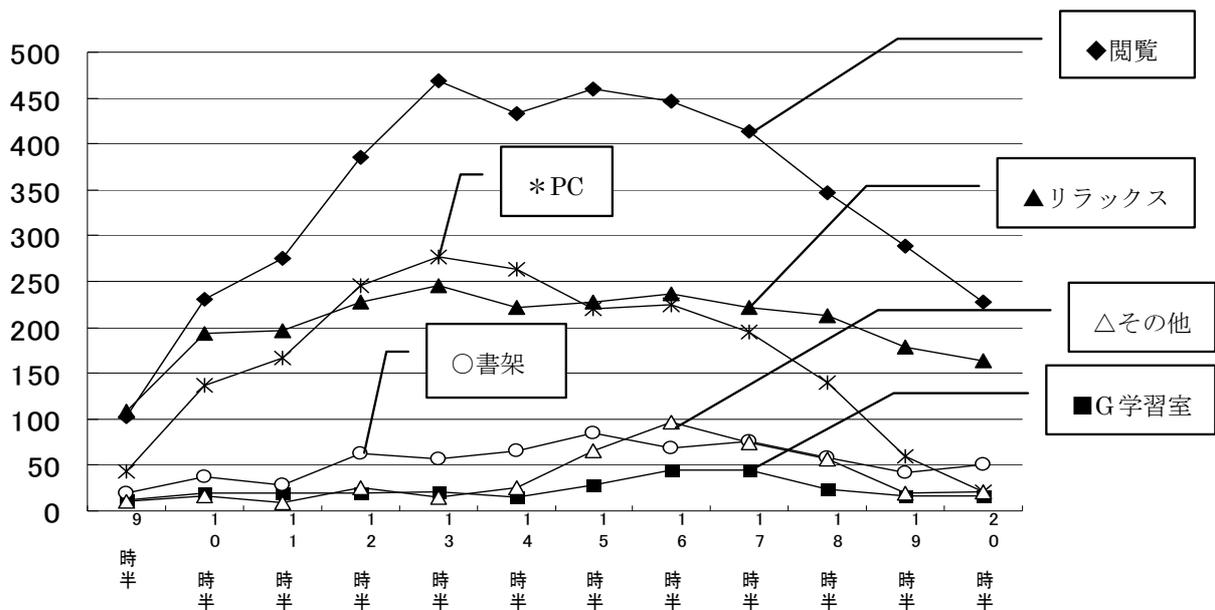
第3表 エリアの属性タイプ別利用人数

エリアの属性タイプ	人数	%
閲覧席スペース	4,051	42.2%
PCスペース	2,422	25.2%
リラックススペース	1,982	20.6%
書架スペース	577	6.0%
その他	407	4.2%
グループ学習室	171	1.8%
合計	9,610	100.0%

属性タイプごとの利用人数が、時間帯によってどのように変化しているかを第1図に示した。この図からは、利用者が多い時間帯は13時半～16時半頃に集中しているものの、エリアの属性によってピークには時差が生じていることがわかる。

3-2 利用パターン

全エリア・全時間帯において、どのような行動を取る利用者が多いかを集計した。結果が第4表である。これらの行動内容について、さらに詳しい行動パターンを検証



第1図 エリア属性ごとの時間別利用人数

第4表 行動内容ランキング

行動内容	人数	%
勉強	4,369	34.0%
飲食	2,070	16.1%
話し合い・雑談	1,131	8.8%
インターネット/メール	945	7.4%
PCでレポートなど作成	818	6.4%
PC・携帯利用(詳細不明)	658	5.1%
読書	634	4.9%
寝ている	410	3.2%
本の探索・ブラウジング	405	3.2%
貸出・返却	174	1.4%
順番待ち	172	1.3%
OPAC検索	160	1.2%
プリントアウト	140	1.1%
コピー	138	1.1%
その他	608	4.7%
合計	12,832	100.0%

するため、例として、「勉強している利用者」について、個人(3,644人)とグループ(725人)に分け、それぞれどのスペースにいるかを集計した。個人学習者の利用スペースは、①閲覧席(2,702人/74.1%)②PC(556人/15.3%)③リラックス(369人/10.1%)の順番であった。一方グループ学習者の利用スペースは、①リラックス(464人/64.0%)②閲覧席(159人/21.9%)③グループ学習室(86人/11.9%)という順番であった。こ

こからは、個人の学習者はほとんどが閲覧席にいるが、同時にPCスペースの滞在も多く、PCを利用した学習場所の提供が欠かせないことが分かる。また、グループ利用については、飲食や談話が可能なリラックススペースの利用が多いが、私語を禁止している一般の閲覧席での利用もかなり多い。このことは、図書館でのグループ学習が必ずしも「話し合い」を前提としたものではない実態を示している。

次に学習者の利用物品に注目してみた。

①飲みもの(835人)②持込資料(553人)③備付PC(531人)④ヘッドフォン(524人)⑤図書館資料(450人)の順に多かった。ここからもPC利用の多さがわかる。また、持込資料の利用と図書館資料の利用は同程度であった。さらに、ヘッドフォンの利用者が非常に多く、周囲の音を遮断して自分なりに集中して学習したい利用者の意識が伝わってくる。

4 結論

4-1 場所としての図書館の実態

本調査により、大学生の図書館利用実態の一端を示すことが出来た。最も多い学習のために図書館を利用する利用者のタイプは、①個人で集中して学習する利用者②PCを使って学習する利用者③グループで相談や雑談を交えながら学習する利用者④グループで静かに学習する利用者として大別できるようである。

結果を元に、ゾーニングによりそれぞれの利用パターンに合わせたエリア設定をしていくことが、今後の「場所としての図書館」機能の強化として重要であろう。

4-2 観察調査の意義と課題

本調査では、従来型の質問紙調査では測定できない、来館利用者の利用行動を詳細に明らかにすることができた。

本調査で得られたデータからは、時間帯別にエリアごとの人数を把握することが可能であり、利用者サービスの改善・向上を計るための信頼できるデータとして活用することが可能である。

観察調査にあたっては、調査員を確保する必要がある。エリア分けを詳細にし、調査員を多く配置するほど、得られるデータの正確性はあがるが、コストも上昇する。両者のバランスを考えて調査計画を立てる必要がある。

調査者の人数が増えると、調査者ごとの観察ポイントや判断のずれも大きくなる。調査目的と観察ポイントを事前によく説明し、調査中にも随時すりあわせを行うこと

がより正確性を高めるため必要である。

以上のような留意点や反省点はあるものの、場所の利用実態を把握するという目的において、観察調査は総じて効果的な手法である。一方で、観察調査では、利用者の主観的な判断や意識を計ることはできない。質問紙調査等の他の手法と組み合わせて利用することで、更に利用価値の高い調査として機能できるだろう。

5. まとめ

本調査により、大学図書館の「場所としての図書館」利用の解明の手がかりを得ることが出来た。電子化により図書館の利用者が減少するという指摘があるが²⁾、図書館が学習やコミュニケーションなどの場所として利用され、その利用が図書館の資料や設備と結びついている実態を明らかに出来た。今後は、こうした場所として大学内の他施設ではなく、図書館が選ばれる理由について、質問紙調査等で明らかにしていくことが課題である。

注・引用文献

1) 根本彰.CA1580-動向レビュー:「場所としての図書館」をめぐる議論.カレントアウェアネス No.286.2005-12-20.<http://current.ndl.go.jp/ca1580>, (参照 2009-09-06)

2) F.W.ランカスター著;田屋裕之訳.紙からエレクトロニクスへ:図書館・本の行方.日外アソシエーツ, 1987, 249p.